跡見学園女子大学マネジメント学部紀要　第 25 号　（2018 年 1 月 25 日）

昭和 45 年大阪万博の非先端的展示

―非“万博少年”の体験した我流万博片隅探訪記―

Tributary Pavilions of low Technology in EXPO’70; a Niche EXPO Reportage in My Own Way by non-“EXPO BOY”

小　川　　功
Isao OGAWA

要　　旨

昭和 39 年東京オリンピックから昭和 45 年大阪万博までの日本は高度成長の最中で、時代が大きく変貌していく時代。高齢化で衰退していく現在を離脱し、約 50 年前、庶民が未来の繁栄を信じて疑わなかった幸せな昭和 40 年代前半にタイム・スリップしてみよう。

沖縄の民芸品等を展示した日本民芸館という超地味なパビリオン出展企業のヒラ社員兼鉄道愛好者として、並の見学者の立場を越え万博なる非日常と遭遇した経験を紹介し、万博少年ならぬ万博社会人を回顧してみたい。筆者は大阪万博の出展企業の新入社員としてパビリオンを手伝ったため、普通の見学者の立場を越えて万博と遭遇した。半年間近未来型パビリオンのスタッフとしてフルに千里丘陵で働いた「万博勤務者」でもなく、さりとて単なる「万博見物人」でもなく、いわばその中間的存在であった。すなわち「万博社会人」としてパビリオン出展企業の若手社員の勤務として期間中「万博応援」を行った。もちろん勤務の前後に自己の興味対象である鉄道関連の施設と愛好する音楽の母国のパビリオンを中心に極めて限定的ながら我流の万博見物を行った。そこそこ入場回数がある割に時間のかかる人気館をパスしたため、いわゆる通の万博愛好者の広汎な国際的体験とは比べるべくもない。しかし筆者の関わった館など先端的科学技術と無縁で、旧来の伝統的領域中心の、片隅に置かれた展示館・展示物等も包容力ある万博には数多く隠れていて、広く森羅万象に及ぶ大阪万博の奥深い意義があったといえるのではなかろうか。

キーワード：日本民芸館、アルゼンチン館、タンゴ、クラウス 17 号、加悦鉄道

Ⅰ．はじめに

昭和 45 年 8 月 3 日幹線道路である阪神国道を［写真－1］のように多数のゾウが行進しているという童話の世界の中のような信じ難い光景に偶然遭遇した。

自宅に近い阪神国道は併用軌道上をノロノロ走る阪神国道線の路面電車は勿論、年に 1 回神戸市電の「花電車」[1] が乗り入れてくるミナト祭りのイベントなど、筆者の思い出がつきない場所でもある。

あとでその正体が来る8月12日万博お祭り広場で開催されるタイ国のナショナルデーイベントと、12 日から 20 日までの「象まつり」に出演するための遠来の愛すべきゾウたちだとわかった。ゾウたちはこの日の朝神戸港を出発、昼頃には筆者の前を通って、武庫川の河原でそのままゴロリと野宿 [2] したようである。ゾウの行進にどのような行政上の許認可手続きがあったのか興味深いが、おそらく「万博」という「印籠」のご威光が効いたものかと推察される。

年配者の筆者には昭和20年代にこの阪神国道を当然の如き顔をして馬力（馬方の制御する荷馬車）が堂々と往来するのを見た幼い日の微かな記憶がある。また大きな橋のたもとには当然ながら国道を往来する牛馬用の立派な水飲み場が、現代のガソリンスタンドよろしく随所に設置されていたことも記憶している。後年昭和 39 年 7 月北海道に初上陸した際、函館駅前の繁華街（郊外の農村部ではない）をいまだに馬力が平然と往来するのを見て、内地離れした大陸的な光景に感激したという思い出もある。しかしゾウの大群の路上の行進を間近に見たのはもちろん初めての経験であり、格別動物が好きという方ではない筆者であるが、しばし非日常の情景の展開に見とれていた。これも国際性を誇る万博の、会場外の一般庶民層にまでもたらした余禄の一つであろ

［写真－1］　ゾウの国道行進（昭和 45 年 8 月 3 日筆者撮影）

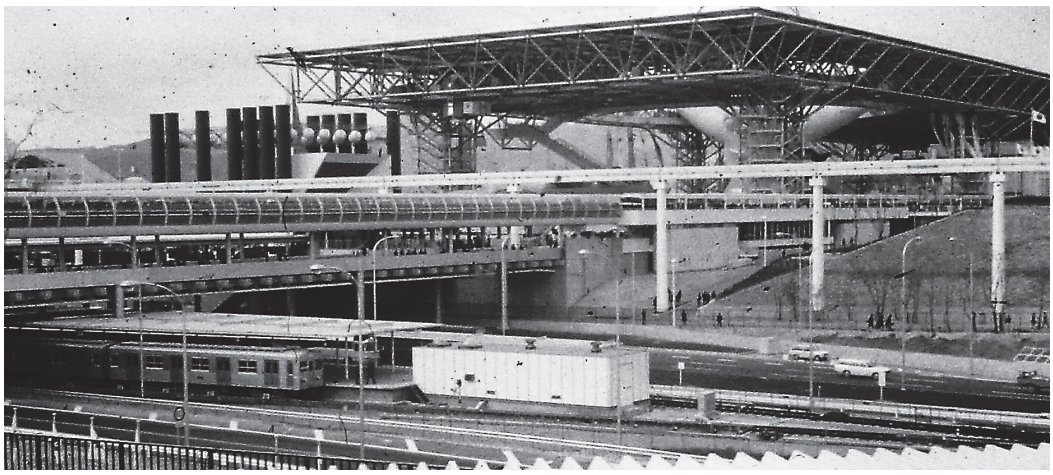
うか。

幸か不幸か、相応の年齢に到達した筆者は東京ディズニーランドにもかなりの個人的な思い入れを有しているが、それに先だって、昭和 45 年当時開催地・大阪の万博出展企業に所属し、万博担当セクションの末端の新人であったため、大阪万博にも個人的なかかわりを有している。万博をリアルタイムで体感できた個人史に加えて、当該企業で社史編纂室長を拝命した因縁もあり、出展企業側の記録としても残り少なくなった「当時の担当者」の一人として、ごくささやかながらも万博体験を語り継ぐ責務を感じている次第である。なお本稿で登場する歴史上の人物には敬称を略したほか、適宜（　）内に当時の役職を併記した。また頻出資料には略号[3]を用いたほか、特記した以外の掲載写真は万博期間中に筆者が撮影したカラー写真を使用した。

Ⅱ．筆者にとっての大阪万博の意義

まず最初に大阪万博体験者等による万博への多種多様な評価・印象等をランダムに概観することから始めたい。海野弘氏は著書『万国博覧会の二十世紀』の中で、[写真－2] の大阪万博を「史上最多の入場者があり、大成功であったようなのに、すぐに忘れられてしまった」「不運な博覧会」（海野，p206）と評している。また吉見俊哉氏も「ディズニーランド的なテーマパークが日本を含む世界各地にできていったことで、万博はその輝きを失っていった」[4]としてディズニーランドの興隆と対比させるなど、両氏とも辛口の評価を行った。

平成 23 年阪大主催の万博研究のシンポジウムで美術史研究者の池上裕子氏から万博研究の課題として、出展「企業に調査に行く」際に、「当時の担当者はもういない…企業へのアクセスはむ



[写真－2]　大阪万博開幕（昭和 45 年 3 月）

ずかしい」（阪大，p139）との意見が出された。また同シンポ主催側の橋爪節也氏も「もっと万博体験の個人史を語り、記憶のデータ・ベースとして残しておく必要があったのではなかったか。それを蓄積せず、語らず、万博を知る人たちは老い…」（阪大，p108）と記憶の消滅を憂いておられる。ネットでの一般国民の意見にも「大阪万博が最後のフィナーレやった…万博ネタはみんなディズニーランドに流れたと考えて間違いない」[5] とか、万博グッズコレクター氏の「万博の頃は生まれておらず…ほんっとに万博をリアルタイムで体感できた方がうらやましいです！」[6] との書き込みも散見される。

ところで現在の我が国では2020年の東京オリンピック開催を目前に、前回の東京オリンピックや大阪万博の開催された時期を回顧する風潮が盛んになっている。勿論、東京五輪や万博や三丁目の夕日のような老人共のノスタルジー[7] には付き合いきれない感じを抱く若い層もあることは十分承知している。

たとえば本格科学冒険漫画『20世紀少年』のなかで物語の重要な伏線として「1970年の嘘」が登場する。これは少年時の作者自身たるケンヂの仲間である悪の総帥「ともだち」が1970年開催の大阪万博に行けなかったことを隠すためについていた嘘である。当時万博に行くことが国民の義務として半ば当然視され、病弱などの正当な理由もなく行かない者は非国民？視されかねないほどの風潮[8] であった。小田マサノリ氏の解釈によれば、「国民すべてを万博に駆りたててゆくということが国策として行われ」（阪大，p124）「まさに戦時中の『国家総動員体制』を思わせるもの」（阪大，p124）ということになる。「御陰参り」という熱狂的な幕末のお伊勢詣りの再来ともいえる珍現象であった。

『20世紀少年』の中で、「大阪万博から45年後、世界支配をもくろむ悪の総帥「ともだち」は、東京湾岸で万博を開催する。「太陽の塔」を模したタワーを中心に、大阪万博のテーマ館やパビリオンが再現され、三波春夫によく似た春波夫が「ハロハロ音頭」を歌う。この悪夢のような万博レプリカこそ、ケンヂとその仲間たちに因果応報のごとく巡ってきたものの象徴である」として菊地史彦氏は『20世紀少年』の作者・浦沢直樹のある種の「万博トラウマ」症候群を論じている。

浦沢は構想段階で、今の世の中が悪いって言われるのはなぜかと考え、1970年の万博の前後で環境がちがっているのに気付いた。万博の前はウルトラマンやアトムに代表されるヒーローたちに憧れていたとのことである。

新幹線やアポロ11号のような科学とヒーローと革命とロックを無邪気に信じた世代を自称する評論家山田五郎も『20世紀少年』について「“アトムと鉄人、ゴジラとウルトラマン、新幹線やアポロ11号、王・長島に馬場・猪木、学生運動とウッドストックなどなどに胸をときめかせた育った私たちは、科学とヒーローと革命とロックを、最も無邪気に信じた世代といえる。だが、「銀色の未来」の幕開けとなるはずだった70年の大阪万博とともに幸福な夢は終わりを告げ、思春期を迎えた私たちを待っていたのは、科学が公害、ヒーローが有名人、ロックがビジネス、革

命がテロへと堕していく現実。同級生の多くは夢から目覚めてオトナになり、残りは現実から逃げてオタクとなった」[9]「自分たちが信じた未来を取り戻そう」[10] と訴えたのが浦沢の『20 世紀少年だ』と評した。

今「大阪万博の熱気を取り戻そう」と訴える集団が存在する。「政府が 2025 年、2 度目の大阪万博招致に本腰を入れだした…20 年東京五輪に続く大阪万博が実現すれば、1960～70 年代の高度成長期と同じイベントの再来である。当時の「日本が輝いたとき」のイメージを今にダブらせ、「良き時代を再び」との期待も透けて見えるが、さて、そううまくいくか？」[11] として、こうした「夢よもう一度」症候群を批判する論説も見られる。こうした「夢よもう一度」症候群とか、「会場に入ればいつもお祭り騒ぎで色んな国々のパビリオンをみていると世界旅行をしている錯覚を起こす」のを「万博症候群」と自己診断したり、「“科学万博つくば 85” に行った第二次万博世代」などが発症する「万博症候群」[12] など、ある種の「高度成長期症候群」が存在する。

以上、大阪万博に対する多様な論評の一端を垣間見たが、ここらで筆者自身の万博観を述べておきたい。もちろん年配者に不可避の「夢よ、もう一度」症候群の発症確率は高いものの、「万博少年」が発症する「万博症候群」ではないと自己診断している筆者は年齢的に団塊世代の少し前であるため、万博開催時には「万博少年」ではなく、当時すでに 25 歳の「万博社会人」であった。筆者にとって恐らく最初の幼児体験の博覧会は昭和 25 年西宮球場で朝日新聞社が開催した「アメリカ博覧会」である。三浦展氏は「朝日新聞社独自の企画というより、アメリカの相当な肝いりで開催されたであろう」[13] と推測されている。もちろん幼児に GHQ の対日懐柔策の意図があったか否か判断できるはずもない。ただ、同展を見て影響を受けた同世代の多くが、想像を絶する米国家庭の近代化生活にあこがれ、「日本も米国の一州になれたら…」[14] といった趣旨の植民地根性丸出しの発言をしたのを微かに覚えている。根が臍曲がりの筆者は眩いばかりの電化生活に一瞬は驚愕を禁じ得なかったものの、言いようのないある種の違和感、言いしれぬ嫌悪感とも言うべき拒絶意識を持たざるを得なかった。多分沖縄流にいえば「アメリカ世」育ちの筆者は昭和 20 年代当時の FEN から流れる JAZZ の騒音に「耳の底に、まだ米英のジャズ音楽が響き」進駐軍に対する不快感を増幅させられたのと同様の拒絶反応であったと想像している。

また中学から高校にかけて、裏山である六甲に何度となく登った。しかし目的地である標高 932m の山頂にはどうしても到達できなかった。アルプスの如く、最後の峨々たる岩場が素人の行く手を阻んでいたわけではない。米軍が昭和 22 年に接収し巨大なパラボラアンテナを配する通信基地として使用していたためである。昭和 35 年 7 月 18 日（月）の筆者の日記には日本人の番兵（？）が「この無線は沖縄まで届く…ここは米軍と防衛庁の半々やな。時々アメリカ人が来よる。ここにいるのは四人の日本人だけや」等と話してくれた内容が細かく記されている。米軍から国に返還されたのはなんと平成 4 年 11 月 12 日付であり、施設が撤去され市民に開放されたのは接収から半世紀近い平成 5 年であった[15]。したがって、元来理系と無縁、（鉄道という前々

世紀の発明品を除き）科学技術の発達には頓と無関心の筆者にはきらびやかな博覧会にあこがれを抱く習性は皆目なかったものと考えている。さりながら、“反博”を唱える理論派でもないので、次節以下の万博の片隅に置かれたメジャーではない展示群でも相応の満足を得て、良き思い出としている次第である。極めて広範囲に及ぶ万博の森羅万象の展示領域の中で、何を思い出とし何を忘却したかが筆者自身の思想・信条・趣味・嗜好等をそのまま投影する鏡であるものと考えている。

Ⅲ．万博日本民芸館での勤務体験

[表－1]　万博日本民芸館の年表

昭和42年9月	日本民芸館は万博へ特設館出展を決議。
昭和43年4月22日	万博日本民芸館は出展契約を締結、出展協議会委員長大原総一郎、副委員長大林芳郎、展示・企画・陳列財団法人日本民芸館、建築・設計・施工大林組、事務局を倉敷レイヨン内に置き、「日本民芸館の建物は、万国博終了後に大阪府へ寄贈し…その運営は財団法人日本民芸館が分館として専ら担任する」（民芸185号，p11）と発表。
昭和43年12月9日	午前10時　民芸館起工式（民芸193号，p41）大林組の設計・施工により着工（民芸207号，p11）
昭和44年10月9日	午前10時半　民芸館定礎式に、弘世委員長の補佐として事務局長浅井啓三（企画部長）、事務局次長宇田川利夫（企画部次長）、井上新一郎（企画部調査課長）ら多数列席し、定礎銘板鎮定の儀では弘世委員長を宇田川局次長が補佐（民芸202号，p38）
昭和45年3月6日	民芸館竣工式（民芸207号，p10）
昭和45年6月29日	午後3時　皇太子夫妻民芸館ご訪問、弘世代表夫妻、浅井代表理事らお出迎え、宇田川館長代理が先導（民芸211号，p20）
昭和45年7月13日	午後3時28分天皇・皇后両陛下民芸館ご訪問、正面玄関に弘世館長、浅井代表代理らお出迎え（民芸212号，p20）
昭和45年9月13日	午後6時　民芸館閉幕（民芸214号，p42）

（資料）田中豊太郎編『民芸』185～214号、日本民芸協会、昭和43年5月～昭和45年10月。

［写真－3］ 日本民芸館と東急モノレール

筆者が一応援勤務者として関わった万博日本民芸館（以下単に民芸館と略）の閉幕までの大まかな流れは［表－1］の通りである。開館時（［写真－3］）の館長・弘世現（日本生命社長）自身の挨拶によれば、「もともと日本民芸館は、倉敷レイヨン株式会社前社長、故大原総一郎氏ならびに川勝堅一氏のお声がかりによりまして企画せられ、浜田庄司氏、大林芳郎氏をはじめご関係の皆様のご協力により、出展準備がすすめられ」（弘世館長挨拶　民芸 207 号，p11）たものとされる。大原は大原孫三郎・寿恵子の長男として明治 42 年 7 月倉敷に生まれ、昭和 16 年倉敷紡績社長に就任、昭和 39 年大原美術館理事長にも就任した美術・民芸に理解ある財界人として知られている。

昭和 42 年ごろであろうか、大原から万博協会へ「是非文化関係のことでご協力をしたいとのお話があり…この民芸館が…パビリオンの中で、唯一と申してもよいほどに、文化の面で日本を世界に紹介していただくということになった」[16] とされる。しかし「大原総一郎さんの…新民芸館への構想」「駒場の日本民芸館が、万国博へ出展するという夢のような話が、突如としてもちあがった」[17] が、実現は全くの「五里霧中」（民芸 207 号，p62）だったと関係者には受け止められていた。同人たる棟方志功画伯の追悼談によれば、昔「館山の浜田屋旅館」に「柳先生とリーチ、浜田の両先生と…大原様と滞在した」際に棟方も呼ばれ、「傑作だと思って創ったもの」を大原から「本物じゃない」（民芸 200 号，p19）と指摘された辛い思い出を語り、「大原様の僕に対する大きい薬、妙薬であった」（民芸 200 号，p18）と回想している。大原は生前「今度の『万博の民芸館』に、棟方さんから、大きな仕事を必ずして貰いたいと…最後まで申しておりました」（民芸 200 号，p19）と大原の秘書役から聞かされていたという。かように棟方ら民芸関係者と長年の親交があり、物心両面での熱心なパトロンであった大原が彼らの優れた仕事を万博の檜舞台に上げて世界中に発信したいと強く念願していた様子がうかがえる。弘世が「最初の企画功労者川勝堅一」（民芸 207 号，p10）の名を特に挙げたのも恐らく大原が最初に美術品収集家の大先輩たる川

勝に万博計画を打ち明けて激励されたためであろう。なぜなら川勝には高島屋東京支店宣伝部長であった戦前から河井寛次郎と意気投合、川勝が河井から譲られた傑作を内緒で1937年パリ万博等の大舞台に出品、大賞に輝いたという逸話[18]もあるからである。

このように大原が発想し、川勝らが賛成して「民芸館の万博出展に向けて始動した直後の昭和43（1968）年7月に、協議会の委員長であった大原総一郎が逝去する。後を引き継いだのは、当時の日本生命社長であった弘世現だった。…パビリオン「日本民芸館」の館長には、弘世現が就任し、当時日本民芸館の二代目館長であった浜田庄司が名誉館長となり、事務員の多くは日本生命から派遣された」[19]とある。

この交代が筆者の万博勤務の遠因でもあるので以下詳しく見ていく。まず昭和43年7月17日大原の急逝後の10月25日出展協議会委員会を開催、「欠員中の委員長選挙を行い満場一致で弘世現氏を推薦し（委員長）就任」（民芸191号，p40）、同時に事務局を倉敷レイヨン内から日本生命企画部内に移転、事務局長浅井啓三（企画部長）、事務局次長宇田川利夫（企画部次長）、事務局員原田隆広（企画部調査課次長）が就任した。（民芸191号，p40）

筆者の記憶では本館2階の企画部内に民芸館チームの新しい事務机が並べられ、幾人かの専任メンバーも順次加わった。真新しい事務机の上には小さい万博の旗が誇らしく飾られていた。ホステス[20]をどうして公募するとか、衣装をどうするとか、若い男性職員としては興味深い会話が真剣に交わされるようになって、なんと言っても当時話題の中心の万博のホステスのことでもあり、ついつい聞き耳を立ててしまった。

昭和44年5月民芸館でホステスを公募し、19名を採用した。（民芸200号，p47）8月3日～10日ホステス19名は駒場の日本民芸館、益子町、芹沢染色研究所等で民芸を学ぶ第一回の研修を受講した。（民芸200号，p47）

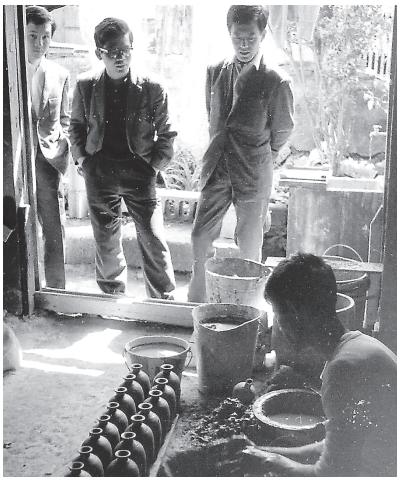
「幸にして衆望を負う弘世委員長も併せてこんどの民芸館館長として就任せられ」[21]たわけだが、多忙な弘世社長を代理・補佐する浅井部長は保険学会で学者連中に論争を挑むほど、普段社内ではウルサ型の論客として畏怖されていた人物であった。新入職員の筆者は最初の部長訓示で「まず俺の論文を読め」と指示され度肝を抜かれた。企画部長という職責上多忙な中ではあったが、何故か民芸館の件では上機嫌で、通常業務に加わる形の様々な公式行事等には正装でせっせと出席されていたようにお見受けした。あとで判明したのだが、浅井部長は民芸はもちろん陶芸により一層強い関心をお持ちであって、浜田庄司名誉館長の謦咳に接することを極めて名誉なことに受け取っておられたように思われる。施工を担当する大林組との頻繁な打合せが当初の主要課題であったが、幸いなことに不動産課長の経験が長く不動産や建築関係にも詳しい宇田川部次長が独自の才覚を発揮して実務面を切り盛りされていた。筆者が企画部在籍中に不動産鑑定士の国家資格挑戦を決意するに至ったのも、不動産の専門家たる宇田川部次長のご活躍ぶりを身近に拝見し、啓発されたためであった。かように当時の筆者が仰ぎ見るほど多士済々の事務局陣容で

はあっても、保険会社の通常業務とは全く異質であり、万博の何たるかは恐らく誰にも未経験の分野であった。民芸館の立ち上げの準備作業には極めて広範囲な知識や教養を必要とする手探りの連続で非日常業務に多忙を極めておられた。やがて、こうした多忙のピークとなる万博の本番の際には我々企画部の若手職員にも必ずや何らかの応援・お手伝いの仕事が出てくるかも…といった耳よりな情報も仲間内で流れ、民芸館の業務への部内の関心がいよいよ高まっていった。

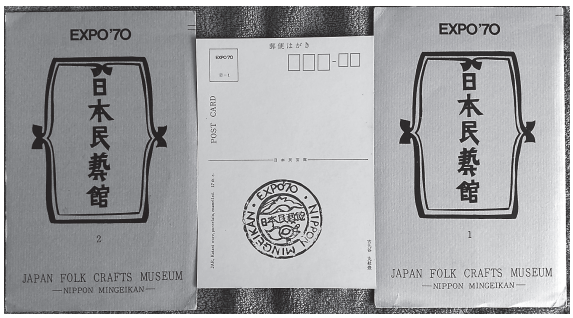
昭和 45 年 7 月「先ごろ…三笠宮、常陸宮各両殿下もみなご訪問になり、また外国からの来賓も多数来館され、一様に館内の落着いた雰囲気…にもご好評を頂いた」（民芸 212 号, p20）とある。筆者の見聞した範囲でも確かにご年配のご夫婦など、館内の休憩コーナーで一休みされ、「ここは良い。とても万博の中にいるとは思えない」といいながら我々のお出しする粗茶をゆっくり召されていた。大阪市の中馬馨市長が開館の祝辞の中で「必ずや我々の心に安らぎを与えてくれる」（民芸 207 号，p18）と指摘した点は見事に達成していた。同時期開館の祝辞の中で大阪府の左藤義詮知事が「甚だ失礼ですが、数の上ではそんなにたくさん入場者はないかもしれません」（民芸 207 号，p17）など、およそ祝辞らしからぬ失礼（？）な本音を述べている通り、当時の当館への世の中の評価は推して知るべしであった。　実はモントリオール博での露骨な企業 PR 意識を排除しようとの反省から「松下幸之助氏が「EXPO7O を企業博にしないために」松下グループの単独出展を辞退すると発言」（小松，p242）したこともあった。そこで協会は「期待される万国博像」という指導指針を示し、宣伝の自粛を呼びかけた。

しかし現実には富を誇る財閥が自己の名を関した館の豪華さをことさらに誇示し合う中で、民芸館では「浜田館長はじめご自分の作品など、全然名前をお出しにならない」（民芸 207 号, p17）点にも左藤知事は感心している。報道陣への事前公開で浜田館長は「第四室の個人作家の陳列品には作者の名を明記せずして、作品を観賞して貰う配慮」（民芸 207 号，p19）を強調した。そもそも民芸運動の創始者・柳宗悦[22]が大正末期名も無き工人達が人々の平常の暮らしに用いるためにつくった優れた雑器・工芸品を指す「民芸」という新しい造語を考え、実用性、無銘性、多量性と廉価性、地方性、協業性の 5 点を重視する独自の「工芸美論」[23]を展開した。一切の解説を排し生の作品を見てもらう民芸館独特の展示方法も、柳の主張した「知る前にまず見よ」[24]の実践であった。したがって事前の研修で相当の知識を有している当館ホステスも観賞しているお客さんから作者や作品の来歴等を尋ねられてたとしても、あえて知ったかぶりの解説めいた答えをしないことになっていたと聞いた。まして交代で応援に来ているだけの臨時要員因の我々は資格ある学芸員でも、事前の研修も受けたホステスでもないので「どうぞ、じっくりと作品そのものをご覧頂きたいと存じます」以外はお答えしないようにと言われていた。したがって館内では会話も解説の言葉もなく、誠に静かであった。

3 年前の昭和 42 年 3 月 16 日から沖縄を旅行中の筆者らは 25 日（土）那覇市壺屋の壺屋焼窯元の仲本製陶所の陶工による作陶工程を［写真－4］のように見学した[25]。



［写真－4］　壺屋焼を見学
（昭和42年3月25日）



［写真－5］　日本民芸館の記念絵はがき（筆者所蔵）
（表紙、記念スタンプ）

この船旅で琉球王府が17世紀後半に那覇牧志村の壺屋に陶芸職人を集め、統合したことに由来することを知った。また民芸運動の柳宗悦は浜田庄司らとともに昭和13～15年4回来島し、庶民の日用品でこれほどまでに装飾性を兼ね揃えたものは珍しいと絶賛した。民芸運動に陶工達が触発されてレベルが上がり、全国的にも有名になったことを現地で学ぶ機会を得ていた。

［写真－5］の日本民芸館の展示品の中には当然ながら民芸運動の推進者たちが絶賛した沖縄の民芸品の数々が含まれており、まだ記憶が鮮明な壺屋の見学体験がいわば一種の事前研修として役立ったのは言うまでもない。

思うに、あの雑踏・騒音・映像、科学万能主義のプロパガンダ展示に疲れ果てた中高年客には待ち時間なしで入場できて、静寂そのものの館内で休息もできる民芸館は一服の清涼剤、砂漠のオアシスとして一定の役割を果たしたのではなかろうかと、末席を汚した関係者の一人として自画自賛している。現在、外国人が日本の魅力として感じて下さるクールなものの価値など、一顧だにされぬ高度成長期、科学技術一辺倒の時流に棹差し、当時は時代錯誤と思われ兼ねない、貧乏臭いローテク展示品を世界の人々が集うハレの万博の場に持ちだして、自らの富や名誉を競い合う巨大財閥の恐竜の如き巨大建築物の間にあえて並べようとした大原総一郎ら出展関係者の反骨・臍曲がり精神も記録に残しておきたい。

閉幕直後の昭和45年9月19日午後5時半から大阪「北京」飯店で関係者の「サヨナラパーティ」が開催され、浜田名誉館長以下46名が参加した。（民芸214号，p42）この内輪パーティには事務局員は勿論、主役のホステスのお嬢さんたちが揃って参列、「それに会期中応援した、日本生命企画部の職員たち」（民芸214号，p42）の参加も許され、筆者も喜んで加わった。当日筆者は整理係のような役まわりで、早めに到着して店頭で待機していた。ホステスの方々の中には

応援期間中に顔を知る人もいて、受付には何の心配もないはずであった。

そんな折、見るからに純朴な村夫子然とした一人の好々爺（と失礼千万ながら当時の筆者の節穴には映じた）が足下も頼りな気にトボトボ店頭に近づいて来られた。筆者はこのお方は会合とは関係なく、多分「道にでも迷われているのかな…」と思って、親切心から「どうされました？」などとお声をかけようか…と思った刹那、やはり傍らで待機中の浅井部長が血相を変えて飛び出し土下座でもせんばかり丁重にお迎えに出る意想外の雲行き、日頃万事鷹揚な弘世社長さえも最敬礼での VIP 接遇に、このご老人こそ首脳部がご到着を今か今かと待ち望んでいた名誉館長・浜田庄司先生その人だとやっと気付いた次第である。ご多忙な浜田先生が本来なら作陶に打ち込みたいはずのところ、この程度の軽い私的親睦会に出席するため栃木県益子町から遠路わざわざ大阪までお越し下さったのだから、社長自ら平身低頭して玄関までお迎えに出るのも道理な訳だ。高名な陶芸家、人間国宝、文化勲章受章者、バーナード・リーチと渡英、ロンドンで個展を開いた方だから…さぞやと自分勝手に浜田先生のありそうなお姿を空想を重ねて全く別な方向へイメージをつくり上げていた結果の大失敗であった。元来が無名の工人による実用品を重視する民芸運動を柳とともに推進し、素朴で力強い作風を醸成されてきた浜田先生らしく、民芸館での大作の展示にも無銘性を貫かれているのと同様に、自己顕示的に芸術家・大家ぶった様子など微塵もなく自己を見栄えよく着飾る衣装等には一切無関心、無頓着のご様子であった。幸いなことに失礼な声を発する直前だったので表立って大失敗にはならなかったものの、誠に冷や汗ものであり、外観だけでの人物判断が如何に早計なことかを痛感した筆者一生の不覚の一つとして忘れられない万博の思い出となっている。浜田先生は万博開催の 8 年後の昭和 53 年益子にて逝去され、享年 83 であった。こんな形ではあったが、70 歳代後半、晩年の先生の謦咳に接する希有な機会を与えられたことは幸いであった。

Ⅳ．タンゴの母国アルゼンチン館への思い入れ

万博会場には熊野、松風…無数の出し物が星の数ほども数多ある中で、筆者の年来の趣味・嗜好と深く関わるために、特に拘った遠く離れた“タンゴ”（丹後）の国からの万博への珍客に絞って、以下に紹介してみたい。

万博のパビリオンの中で筆者が確実に訪問したと断定できるのは、民芸館、三菱未来館など写真を撮影したもののほか、証拠資料が残る韓国館（記念スタンプ）、スカンジナビア館（レストラン領収書）、アルゼンチン館（レストラン領収書）など、ごく少数に過ぎず、とても自慢できるような状態ではない。しかし関西に居住して宿泊代、新幹線代は不要で、かつ自腹を痛めず平日の会場に従業員パスで入り、休憩時間にいわばタダで多少は見物できたのだから、考えて見れば遠

方から苦労して来場された万博難民に比して大変めぐまれた立場にあった。にもかかわらず、筆者の年来の反科学的で、片意地な性格が災いして、大阪の猛暑の最中に長時間並んでまで米ソ両大国の宇宙旅行の成果物なんぞを随喜の涙で拝観させて頂く気には到底ならなかった。結果的に「いわゆる開発途上国の小規模館…は人を集めることはできず」[26] とされ、並ばずに入れる中南米諸国など、無名のパビリオンを片っ端から見て回る羽目になった。正直ほとんど予備知識のない国の展示を見るのは、筆者にとって初めての擬似世界旅行のような体験であった。小松左京氏の回想録によれば、万博「理念は京都がつくった」（小松，p230）際に、梅棹氏らの共通の感想として「とにかく『出店』でもいいから『万国』顔をそろえてつどいくる『万国博』を、極東の日本でやる意義」（小松，p182）を見いだして「AA諸国の参加を重視し」（小松，p172）、結果として「世界七十六ヵ国という空前の参加国をあつめ」た大阪万博は「開発途上国が、多数参加し、会場内展示スペースでも優遇され」（小松，p260）ていたから、負け惜しみのようだが中小館訪問は万博の基本理念にも沿っており、結構『出店』でも見応えがあったわけだ。

その中でも筆者は中南米諸国のパビリオン群、特に［写真－6］のアルゼンチン館の見学には格別の思い入れがあった。

周知の事実であるがアルゼンチン館の基本情報（ガイド，p129）として、まず中央部「水すましの池」の西畔、オランダ館とスカンジナビア館の間に位置する地下1階、地上3階、延べ1,100㎡の中規模独立館であった。外壁は青、赤、黄色の原色に塗り分けられ、1階は180名収容のレストラン、2階は平和と自由と幸福をテーマとする主展示場であった。別棟の小劇場では同国の自然や国民生活紹介の映画[27] が上映された。

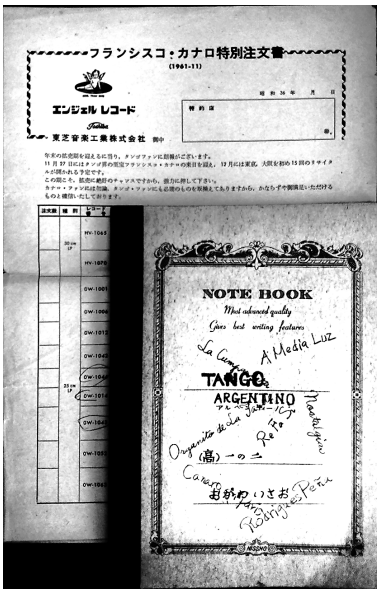
アルゼンチン館の情報としてはテーマ：「平和と自由と幸福」、所要時間：5分、収容：350人、建築面積：727平方メートル、延べ面積：1,108平方メートル、参加決定日昭和44年2月6日などが得られる。

［写真－6］　アルゼンチン館のデザイン（公式ガイド）

6 月 8 日（月）のナショナル・デー（ガイド，p223）には同国代表ロドルフォ・ウルバーノ・フライレ（ガイド，p336）駐日大使夫妻が招待され、式典、行事が行われた[28]。後年の愛知万博ではアルゼンチン・タンゴショーの記事が散見されるのだが、ネットで検索できた大阪万博時アルゼンチン館の思い出はカレー飲食など非常にレアである[29]。

同館の特色の一つに「食肉生産国を印象づけようと、名物の牛肉料理やワインを豊富にそろえ」（ガイド，p129）るなど食堂に注力している点が挙げられ、公式ガイドにもパビリオン内食堂の「ご自慢メニュー…名物の牛肉料理、ワイン、スナック」（ガイド，p282）と記載され、「…アルゼンチン料理等々”味の世界旅行”にふさわしい内容」（ガイド，p267）と言及されていた。筆者も万国博覧会最終日のお昼にお目当ての「ファサ・コトブキ」でアルゼンチンの焼肉料理を賞味し、タンゴ生演奏[30]ともども大満足した。

しかし同館の最大の特色は何よりも「アルゼンチンの芸術が披露され、タンゴの国のムードにひたりながら…たのしめる趣向」（ガイド，p129）にあった。たとえば展示品の中には「かつての大草原パンパを走りまわったガウチョ（カウボーイ）が使っていためずらしい品」（ガイド，p129）もあるが、パンパ、ガウチョという魅力的な単語だけで筆者にはこの名を冠するタンゴの名曲の旋律を想起させる。その理由は同じアメリカの名がつく音楽ではあるが、昭和18年国指定の“敵性音楽”ジャズとは異なりラテン・アメリカ音楽、特にアルゼンチン民族音楽のタンゴには言いしれぬ深い魅力を感じていたからである。一緒に六甲山にも登った中学・高校時代の友達にモダンジャズを愛好するH君がいて、彼とよく音楽論争した。人生は皮肉なもので何の因果かジャズを礼賛しタンゴを酷評していた彼が大学を卒業して長らく大手商社のブエノスアイレス支店勤務となり、三菱商事の大物支店長A氏らと切磋琢磨している自慢話を聞かされ、彼の地へ行きたい夢を抱く筆者をひどくうらやましがらせた。自らをタンゴファンと自覚した時期ははっきりしないが、昭和36年4月高校1年2組に進級、その頃来日の大物楽団にも刺激を受けたものか、［写真－7］のように単語帳を流用したタンゴ専用の趣味ノート「タンゴアルヘンティーノ」を作成開始して、「センティミエント・ガウチョ」「アディオス・パンパ・ミヤ」などの曲名、楽団名、歌手名、レコード情報等を盛んに記入していた。



［写真－7］ 筆者のタンゴ帳（昭和 36 年作成）

その趣味ノートに挿入された昭和 36 年□月「フランシスコ・カナロ特別注文書」には

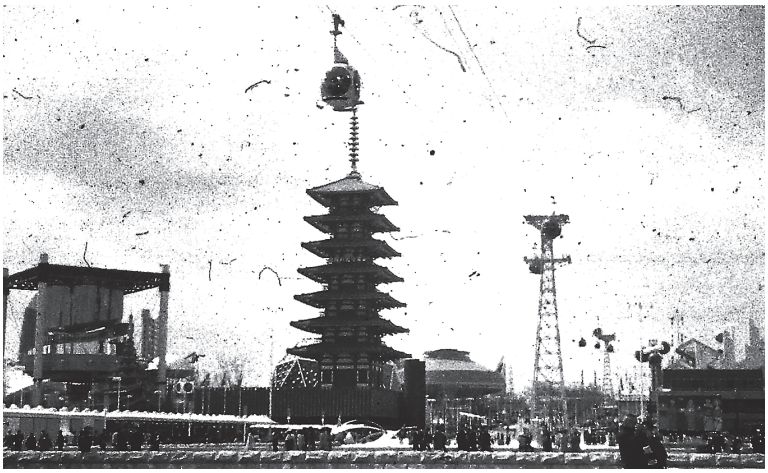
「11 月 27 日にはタンゴ界の至宝フランシスコ・カナロの来日を迎え…」とのレコードリストがあり、30cmLP1,500 円、25cmLP1,000 円の超高値にびびりながら、何点か○印を付け、購入を真剣に検討していた。また当時ラジオから聞こえるタンゴに耳を澄ませ、偶然に微かに聞こえた高松ポルテニャ音楽研究会岡田会長の西日本放送「タンゴアルバム」等のタンゴ番組を雑音混じりで必死に聴取したり、高価なレコードにはなかなか手が出ず、当時流行のソノシート『アルゼンチンタンゴ』を 360 円で安価に購入して代用したりしていた。

しかるにあろうことかタンゴの本場アルゼンチンでさえも、ジャズ等のアメリカ製退廃音楽に押され、衰退の運命[31] にあると聞いては、ここは一つ本気で応援して「身体から米英之匂い、米英色を一掃」[32] してやろうという気になって、万博期間中アルゼンチン館に機会ある毎に入り浸って流れる名曲の調べに酔いしれた訳である。

Ⅴ．クラウス 17 号、加悦鉄道客車の遊園地片隅展示

一方、今一つの趣味の柱である鉄道愛好者として、［写真－8］の北大阪急行電鉄の臨時的仮設建築物たる万国博中央駅、前掲［写真－3］の東急の万博モノレール[33]、［写真－9］近鉄レインボー・ロープウェイ[34]、［写真－10］エキスポランド一周のミニ・レール等の鉄道施設の観賞に明け暮れたことはもちろんである。

［写真－8］　北大阪急行の試運転（昭和 45 年２月）



［写真－9］ 近鉄ロープウェー

［写真－10］ エキスポランド一周のミニ・レール

筆者の保存切符を覗くと［表－ 2］のように、万国博開幕前後の記念乗車券・普通乗車券が集中している。

［表－2］ 万博関連のコレクション類一覧

昭和 36 年 11 月 27 日　フランシスコ・カナロ楽団来日記念レコード「特別注文書」

昭和 42 年 3 月 1 日　阪急北千里～南千里開業「1 日付北千里入場券」（保存）「1 日付自動改札用バーコード付乗車券（硬券）」（初の自動改札オムロン）

昭和 45 年 2 月 24 日　新大阪～江坂／北急万博中央口～江坂開通「開通記念乗車券」

昭和 45 年 3 月 3 日付「万博中央口～地下鉄 2 区」

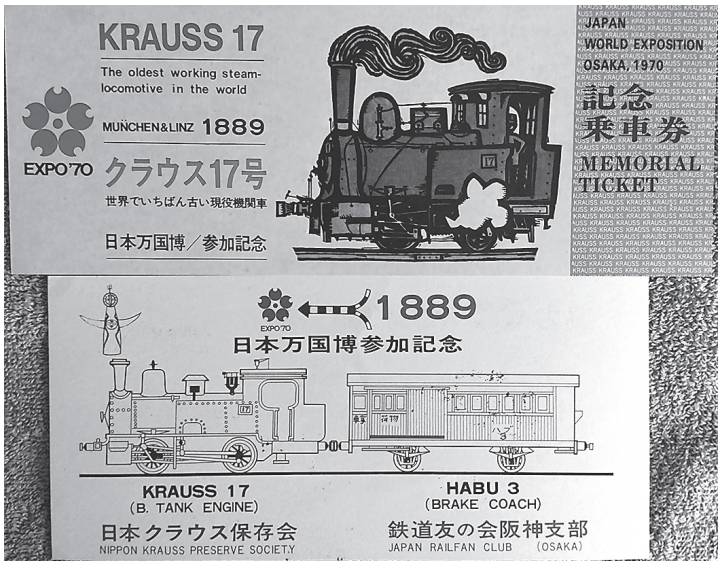
昭和 45 年 3 月 9 日付「万博中央口～地下鉄 2 区」
昭和 45 年 3 月 23 日付「万博中央口～地下鉄 2 区」
昭和 45 年 3 月　万国博覧会民芸館勤務　クラウス 17 号　写真多数
昭和 45 年 3 月　北急万博中央口駅
昭和 45 年 4 月 12 日　両親と千里「美松」（箸入）
昭和 45 年 5 月 4～5 日企画部員として民芸館応援
5 月 4 日付「万博中央口～地下鉄 2 区」／「韓国館」記念スタンプ
5 月 4 日付「茨木駅精算票」（保存）／
○「クラウス 17 号　世界でいちばん古い現役機関車　日本万国博／参加記念」記念乗車券（半券)、(裏面)・カゴメ株式会社
○「日本万国博参加記念　KRAUSS 17 日本クラウス保存会・HABU 3 鉄道友の会阪神支部、(裏面）協力・カゴメ株式会社
○クラウス 17 号　記念乗車券（半券)、(裏面)・カゴメ
クラウス 17 号」「ハブ 3 号」記念券
昭和 45 年 7 月 23 日万国博覧会「スカンジナビア館レストラン」領収書
昭和 45 年 7 月 29 日付「万博中央口～地下鉄 2 区」
昭和 45 年 8 月 3 日　自宅前の阪神国道を多数のゾウが行進
昭和 45 年 8 月 8 日　万博中央口～地下鉄 2 区
昭和 45 年 9 月 13 日付「万国博中央口から芦屋ゆき　万国博記念乗車券」「万国博中央口～地下鉄 2 区」／ 13 日万国博覧会「アルゼンチン館レストラン」領収書
45 年 9 月 13 日撮影 8mm『ADIOS EXPO '70 万博最後の日』
平成 2 年 11 月 10 日購入　小室洗心著『加悦鉄道案内』加悦鉄道、大正 15 年 12 月 1 日発行
（資料）筆者所蔵『コレクション』類（原本）

多くの「万博少年」のように、先端技術にあこがれる科学礼讃の傾向は皆無であるため、新幹線は仕事での乗り物であって、趣味の対象とはならず、19 世紀の蒸気機関止まりの超アナログ技術で十分満足していたのであった。

不当にも正規のパビリオン扱いされず、［写真－11］の「日本現役最古のクラウス 17 号　大阪万博参加記念ポストカード」（カゴメ株式会社協賛）などを除き、あまり資料や写真が残っていないのは残念であるが、日本クラウス保存会が主宰し、カゴメ株式会社が資金面で協力・協賛した提供施設である「クラウス 17 号」という「世界でいちばん古い現役機関車」[35] と、鉄道友の会阪神支部による京都府北部・丹後の加悦鉄道のドイツバンデルチィペン製木造緩急車ハブ 3 [36] の展示は前節と同じくタンゴの国からの珍客という特別の思い入れもあって、車両の前に群がるこ

どもたちの立ち去るのを辛抱強く待ちながら、物言わぬ車両の体験してきた哀しい物語に思いを馳せて、じっくりと時間をかけて穴のあくほど観賞させて頂いた。

場所はエキスポランドの「こどもが夢中になる乗物がいっぱい」（ガイド，p291）のライドセンターの一角で、宇宙ロケットを思わせる宇宙ステーションの脇、ダイダラザウルスが騒々しく横を駆け抜ける重要な文化財としては甚だ不適切な位置に［写真－12］のように単なる子供だましの遊具の如く配置された。



［写真－11］ クラウス 17 号記念乗車券（筆者所蔵）

［写真－12］ クラウス 17 号展示（エキスポランド）

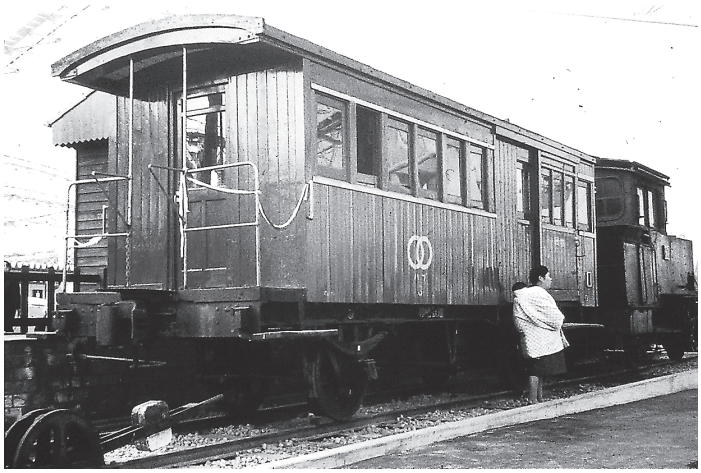
『公式ガイド』に「80年間活躍した蒸気機関車クラウス17号もあります」（ガイド，p293）とのごく簡単な記述があり、『公式ガイドマップ』にも「ライドセンター」の文字の左下に列車らしきものが描かれているが、説明のための文字はない。巻末「施設参加者名簿」にも「クラウス17号保存会」が「エキスポランドへの蒸気機関車、客車、駅長室の提供」（ガイド，p344）者である旨の記述があるのみで、扱いは粗雑である。

「クラウス17号」に関しては鉄道愛好家として著名な佐々木桔梗氏が主文を寄稿、写真提供した『クラウスよ永遠に　KRAUSS No.2213』という、西武百貨店宣伝部が万博前年の昭和44年6月発行したA4版の不思議な小冊子が存在するが万博出展を見越した物ではない。出版社ではなく商業百貨店の宣伝部が編集・発行しているためか、公共図書館には皆目書籍として所蔵されていない。北海道の炭礦通の信賀喜代治氏は「蒸気機関車十七号が東京のデパートで競売され…見知らぬ他国のデパートで、さらし者になっている姿は見るに忍びないものだった」（信賀，p51～52）と昭和44年5月の昭和炭礦の閉山悲話を語っている。したがって昭和44年5月閉山直後の6月百貨店発行のカラー写真入りの豪華写真帳の正体は、炭礦関連で融資等を行った債権者が金目の「クラウス17号」を差押さえ、百貨店店頭で商品として販売した際の『売立目録』[37] そのものであったと考えられる。

資金面で協力・協賛したカゴメがいかなる意図で前世紀の遺物である蒸気機関車「クラウス17号」展示に多額の広告宣伝費を投じたのか、同社HPには「1970年，大阪万博に蒸気機関車を出展」[38] とあるのみで真意は不明である。当該展示にも詳しい背景の説明は見当たらなかった。

そこで当該売立目録に準拠しつつ、筆者なりの独断と偏見で、そこに書かれていてしかるべき解説の再現を試みたい。明治20～30年代の鉄道業界は大手幹線鉄道会社の群雄割拠の時代であった。官設鉄道は主に英国、北海道は米国からの技術者や車両を導入する中、九州鉄道会社は別の発想に立って主にドイツからの技術に依存していた。佐々木桔梗氏のいう「機関車などもそれらの私鉄がそれぞれに諸外国から直接買入れていた」（永遠，p18）状態を列強による中国利権の分割統治の予兆の如き欧米資本の技術支配の構図とも、明治期鉄道業の国際性の反映とも、「人類の進歩と調和」の趣旨に沿って多様な解釈が可能であろう。

しかし明治40年九州鉄道の国有化とともに国鉄所属となったものの、吸収合併された非主流派の悲哀を嘗め、大正14年に除籍、つまり戦力外通告を受けた。その後流浪を余儀なくされた同機の浪人中の足取りは定かでなく、土木機械並に私鉄線の「建設工事の土砂運搬などに酷使された」（信賀, p52）のち、当然ながら僚機15号とともに「仕事の終えた2両はスクラップ」（永遠, p21）のはずが運命のいたずらで、昭和6年「九州の地から流れ流れて、最も遠い北海道の山奥」（永遠，p20）留萌の炭礦に辿りつき、終点の昭和にあった明治鉱業昭和鉱業所の入換機として漸く安住の住処を得た。昭和44年この昭和炭礦が閉山に追い込まれたあとも同機の波瀾万丈の物語は続く。



［写真－13］ 加悦鉄道客車「ハブ 3」展示

その頃同機に出会うためには大変な苦労を必要とした。筆者も日本一周旅行の道すがら稚内を早朝に出てほぼ10時間国鉄の普通列車に乗りっぱなしであったが、留萌本線で恵比島駅を通過しただけで、留萌鉄道の車両に遭遇する機会は得られなかった[39]。まして留萌鉄道の終点・昭和駅に出入りする「クラウス 17 号」の姿を拝めるどころの話ではない。

一方、［写真－13］の加悦鉄道所属の松葉型スポーク輪軸の木造付随荷物緩急車「ハブー 3」に関して篠崎隆氏は以下のように的確に解説している。長文であるが引用させて頂く。

「明治 22 年（1889）ドイツのファン・デル・チーペン社（Van der Typen）で製造された、荷物室と客室をもつ 2 軸の木造手荷物緩急車です。当時の列車には、貫通ブレーキ（運転手の操作で列車の全車両に一斉にブレーキを掛けることができるブレーキ）がなく、機関車、客車などはそれぞれ単独にブレーキ操作をしていました。外観上は、客室側にオープンデッキがあり、大きな荷物扉とステップが特徴です。今ではほとんど見られなくなった松葉スポークの車輪（車輪のボスからリムへ 2 本 1 組の松葉を広げた形のようになっているスポークをもつ車輪）を履いています。

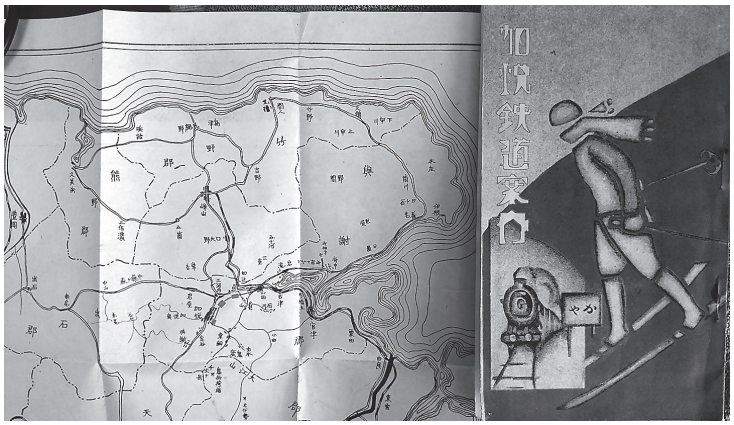
大正 11 年（1922）に、鉄道省より旧伊賀鉄道（旧近鉄伊賀線の前身）に払い下げられ、旧伊賀鉄道で、室内照明が石油ランプであったものを蓄電池による電球照明に改良、また大正 14 年（1925）に鉄道省が行った自動連結器一斉換装に呼応して、ネジ式連結器を自動連結器に交換しています。

大正 15 年（1926）の加悦鉄道開業時に旧伊賀鉄道より譲受しましたが、前述のとおり修繕を必要としましたので、実際の稼働は昭和 2 年（1927）7 月でした。昭和 44 年（1969）に廃車、その翌年には大阪の日本万国博覧会に、旧九州鉄道の蒸気機関車クラウス 17 号と共に出展しています」[40]

筆者所蔵の「加悦鉄道沿革大要」によれば大正14年山陰線開通の際、「丹後山田停車場はその位置加悦谷の最北端に偏せるを以て地方民の意を満す不能」（案内，p42）、加悦町を中心に山田豊岡間鉄道期成同盟会を組織、「該線路の一部たる山田加悦に地方鉄道を敷設せんことを企画」（案内，p43）したところ、「建設費額三十四万四千円なりしも軌条及車両の中古品を採用すれば三十万円を以て建設可能の見込を以て資本金三十万円の株式会社を設立」（案内，p42）したとある。地方の零細私鉄建設を目論んだ地域コミュニティが、メインの宮津銀行からと目される当座借越、借入金、借入有価証券等の短期資金調達を受けつつも、固定負債として調達不能な建設費超過部分数万円の節減努力が伊賀鉄道等からの中古車両譲受の模索であった。譲った伊賀鉄道側も多額の電化資金の一部に充当する財源ともなっていた。

地域コミュニティが加悦鉄道開通に歓喜する様子は、大正15年12月1日（開通4日前）［写真－14］のような加悦鉄道発行の小室洗心著『加悦鉄道案内』巻末の「祝開通」広告に、細井直義（酒造）、市田力蔵（縮緬商）、西原雄助（縮緬製造）、白須重右衛門（酒造）ら加悦鉄道役員陣を含む地元商人多数（多くは総数761名に及ぶ同社株主か）の名が並ぶことからも推察できる。延長僅か3哩5分のミニ私鉄の名高い観光地がさほど多数あるとも思われぬ沿線案内が文頭に「加悦鉄道本社」写真を掲げ、4頁もの「加悦鉄道沿革大要」を収録した本文46頁、巻末広告32頁、総78頁もの堂々たる書籍となっていることも地元の異常な興奮ぶりを如実に示している。

鉄道省以前の履歴も諸説あるようだが、近年の有力説として明治期・地方私鉄が好きな方が雑誌記事[41]に準拠した調査結果を紹介しておく。「加悦鉄道ハブ3客車は、九州鉄道ではなく讃岐鉄道に明治23（1890）年、2320～2323（のいずれか）としてドイツ Vandel Typen に発注され、その後讃岐鉄道が山陽鉄道と合併ののち国有化、鉄道省所属のユニ3905となり大正7（1918）年9月，伊賀鉄道に払い下げられ、昭和2年（1927）伊賀鉄道電化時に加悦鉄道に譲渡され活躍した」[42]



［写真－14］『加悦鉄道案内』（大正15年、筆者所蔵）

佐々木桔梗氏が「調べれば調べるほど、世界でも最古の部類に属する宝物のような機関車」（永遠, p20）、「流浪の果てにこの北海道の山奥に辿りつきました…数奇な運命の機関車」（永遠, p21）と絶賛されるように、この無機物たる鉄の塊にこれだけの多彩な歴史、文化、風土等のエッセンスが集積し、当時から半世紀経過してもいまだに解明し切れない謎も残っていることを考えると、同時期注目されていた「月の石」とやらの無機物と何ら遜色ないばかりか、「廃車・スクラップという運命から不思議に逃れて」（永遠，p21）「奇跡が 2 度もおきた」（永遠，p22）結果、万博の檜舞台にも立てた幸運の奇跡を呼ぶ「不死身のクラウス」（永遠，p22）には、公認パビリオン並への昇格を推薦したかった。素敵な写真をアップしている鉄道写真家岩堀春夫氏も筆者同様に「万博にはクラウスを撮るだけに行ったようなものだった…期間中だけ使われた万国博中央口駅を撮っていないのが辛い…子供がまとわりついて大変だった。ここで記念写真撮る親の気持ちが理解できない」[43] と同機の文化財としての価値を理解できぬ衆生を嘆いている。ただし「こどもが夢中になる乗物」（ガイド，p291）を配したライドセンターにある単なるおもちゃと見做されていた以上、岩堀氏の嘆きは本来は文化財たるクラウスをエキスポランドに配した協会の無理解に向けられるべきものか。

昭和 45 年 9 月 13 日万博最後の日には熱気に包まれていた博覧会閉幕の独特の雰囲気を是非とも記念に残しておこうと、会場内のあちこちを歩きまわりながら、北急万博中央口駅、モノレール、クラウス 17 号等は勿論、日本民芸館、アルゼンチン館をはじめとする各パビリオンの様子をできる限り撮影した。最後には何度もお世話になった東急モノレールに乗車して、上から会場全体の夜景を俯瞰した。撮影した粗末な 8mm を編集、『ADIÓS EXPO ’70　万博最後の日』[44] と名づけた。

Ⅵ. むすびにかえて

大原総一郎とも親交があり、文化や芸術方面にも造詣の深い日本生命弘世社長が当時どのような崇高なお考えで万博民芸館の事務局を引き受けたのかは当時新入職員に毛の生えた程度の分際の筆者には到底知るよしもない。計画自体も具体化していない当初段階で唯一の推進者が急逝したプロジェクトは一般論として立ち消えになっても不思議ではないからである。しかも利益を得られる儲け話ではなく、あとあと何かと物入りの社会貢献事業である。無駄な出費を嫌う不況期ならこれ幸いと謝絶、縁切りするような場面であろう。筆者にはやはり、当時の時代背景、高度成長期の真っ最中における国家プロジェクト、東京と並んで経済の中心地であるとの大阪・関西財界人の自負等の諸要素を抜きには考えられないと思う。

筆者と同様の俗界に住む年上の幹部連中の下世話な当時の率直な気持ちを察するに、①万博は

大阪の企業社会にとって天神祭の何倍・何十倍もの「ムラ祭り」である。②いずれ奉加帳が回って来て相当の寄付を出さされる。③ムラの旦那衆はいずれも独自に豪華な家紋・屋号付「船渡御」を仕立てる習わしである。④ならば少々小振りの「船」でも、単なる「かこ（水夫）」役で大金を出すより「船長」役を務めた方が幾分格好いいといった「鶏口となるも牛後に…」的発想ではなかろうか…と想像している。おそらく三和銀行主宰の「みどり会」あたりから、声がかかっていたとしても不思議はない気もするからである。

結果的に万博民芸館事務局引受けがどの程度の経済効果があったのか不明である。「日本生命は日本民芸館の出展に参加します」（民芸207号，p8）といった広告もおそらくさほど宣伝効果があったとも思えない。しかし一番大変な「飛び込み仕事」を引き受けた企画部の幹部各位からボヤキの類を聞かされた記憶が殆どないことを考えると、多忙ではあっても華やかな万博行事の一端を担えたという満足感を共有していたものとお見受けした。また余分な休日出勤を強いられた形の筆者のような若手職員層から不満・苦情の声が出たことはなく、逆に同期の職員から羨ましがられるほどの良い思い出となった次第である。

その後も思い出覚めやらぬ万博の余韻を訪ねる筆者の旅は続き、昭和47年4月29日天橋立へ行った際に、加悦鉄道に足を伸ばし、終点の加悦駅で「加悦鉄道見学記念」スタンプ付「2号機関車見学記念入場券」を購入した。目的は万博でクラウス17号と並んで展示されていた客車に再会するためであった。加悦鉄道の客車の方も大変喜んでくれたと見えて、先方の方から筆者が当時暮らしていた泉北ニュータウンまでわざわざ出張興行してくれた。（昭和49年11月15日泉北パンジョ開業記念に加悦鉄道SL4号機と客車展示　同年11月19日撮影）

平成2年11月10日には開通時の『加悦鉄道案内』にも古書店で遭遇した。また万博跡地の万博公園、エキスポランド等には少なくとも昭和47年6月と昭和49年4月27日の2回は訪れている。

その後も昭和60年7月のつくば未来博等をはじめ、昭和56年7月21日の神戸ポートピア博、昭和62年5月の奈良シルクロード博などいくつかの地方博の会場にも足を運び、つくば万博のモノレール、トレーラーバスやポートピア博覧会の雪印銀河鉄道等にも乗車したことは記憶するが、大阪万博のあの熱気を知る者にとってはいずれも食い足らず、さほど大きな衝撃を感じることはなかった。むしろ昭和58年4月東京ディズニーランドのオープン時の方に万博の時の感情に近いものを感じた。

何十年かの完全な空白の後、平成29年3月26日懐かしい万博跡地を訪れた。妙見山から妙見の森リフト、ケーブル山上駅・黒川駅、阪急バス、能勢電妙見口・川西能勢口、阪急蛍池を経由して、大阪モノレールで万博記念公園に到着した。まず万博記念公園内自然文化園内の万博のメモリアル施設「EXPO’70パビリオン」を興味深く見学した。折りも良く、「人々の記憶に強く印象付けられているパビリオン建築」の紹介を中心とする企画展「The Legacy of EXPO’70

建築の記憶ー大阪万博の建築」が前日の 3 月 25 日（土）から始まっていた。当日は 2 時から第一人者橋爪紳也氏と大西若人氏の興味深い開催記念対談もあったため、鉄鋼館など特色ある展示館の構想段階の当初設計図、模型写真、建設現場記録などの初公開資料等の展示を前に、いかにも建築家らしい人々が多数当時の実験劇場さながらの様々な創意工夫に関して熱心に議論しているホットな場面にも遭遇、大阪万博の当時の熱気を思い出させてくれた。

文系プロパーの筆者とは関心領域を全く異にするとはいえ、約半世紀も以前の既にこの世に存在しない古色蒼然たる仮設建築物なんぞに深くこだわり、盛んに議論し会うという、超物好き？の多くのお仲間に出会って、意を強くした。

さてお目当ての常設展には有名パビリオンの情報が満載で、映像コーナーでは東急提供のモノレールから見た各館（民芸館などモノレール沿道のみ）のカラー映像が流されていた。筆者が興味を持っている中小・零細館の情報がどこかに記載がないか必死で探した。各館の紹介コーナーの一角にアルゼンチン館の写真が掲載され、一階レストランでタンゴ演奏と焼き肉料理が、ナショナルデーにはマリアッチ演奏があった旨の簡単な説明はあったものの、ホセ・バッソ、パンチート・カオというタンゴ楽団の名称等には言及がなかった。

また辛うじてクラウス 17 号の写真がたった 1 枚あるも、カゴメ提供、機関車の説明など一切なし。正規のパビリオン扱いされず単なる施設提供のためか、残念ながら万博の歴史から存在そのものが抹消されているように感じる。本稿の拙い記述でも何かの参考になれば幸いである。

最後に立寄った万博グッズ売り場には当時の公式ガイドマップ（複製）などの複製品のほか、当時の各館パンフの現物（中古）等を販売中で、確かに入館したが購入はしなかった「みどり館」の絵はがき等を見つけて購入、宿で楽しかった万博の夢でも見ようとモノレールに乗り、阪急南茨木（当時は万国博東口最寄りの臨時駅として新設）から京都の烏丸へ向かい、筆者の万博再訪の短い旅を終えた。

注

1）昭和 49 年 10 月に開催された第 1 回「堺まつり」の当日南海軌道線（現阪堺電気軌道）で花電車を見たのが筆者には最後の体験である。

2）「8 月 3 日タイから荷積みされ神戸港に着いたゾウ 21 頭が陸路万博会場まで行進し、武庫川で宿泊、8 月 4 日万博会場についた」（「わたしと万博（41）2007/10/21）

3）略号は以下の通り。案内…小室洗心著『加悦鉄道案内』加悦鉄道、大正 15 年 12 月 1 日発行（平成 2 年 11 月 10 日購入）、民芸…田中豊太郎編『民芸』日本民芸協会、海野…海野弘『万国博覧会の二十世紀』平凡社、平成 25 年、永遠…『クラウスよ永遠に　KRAUSS No.2213』西武百貨店宣伝部、昭和 44 年 6 月（頁付けなく、筆者の仮頁）、ガイド…『日本万国博覧会公式ガイド』日本万国博覧会協会、昭和 45 年 2 月、マップ…『日本万国博覧会公式ガイドマップ』日本万国博覧会協会、昭和 45 年 3 月、信

賀…信賀喜代治『山の SL たちー北海道の炭鉱鉄道』みやま書房、昭和 48 年、小松…小松左京『私の［万博・花博顛末記］』廣済堂出版、平成 6 年、阪大…大阪大学 21 世紀懐徳堂編『なつかしき未来「大阪万博」: 人類は進歩したのか調和したのか』創元社、平成 24 年。なお筆者には万博当時と、社史編纂室長としての勤務時の 2 回、社内の直接担当者に詳しく聞く機会があったのに、いずれも不本意なままに終わったことを甚だ残念に思っている。関係者の多くがもはやご存命でない状況での筆者の不完全な証言には躊躇もあるが、公開講座の機会を与えられたのに甘えさせて頂いた。

4）吉見俊哉『万博と戦後日本』講談社学術文庫、平成 23 年。

5）6)「大阪万博・大阪花博の思い出その 2」http://machi.to/bbs/read.cgi/osaka（2003/03/21）

7）2016 年 3 月 27 日、万博記念公園の EXPO '70 パビリオンで記念講演会「万博少年の思い出三昧！」が開催され、万博少年たちが思い出トークで熱狂した。(「ニュースウォーカー」https://news.walkerplus.com）

8）昭和 45 年 2 月 25 日付の週刊朝日「日本万国博」ガイド臨時増刊号を購入勉強して「私たち親子は夏休みに行きました」四国新居浜のとある「我が家では私と長男が行きました、隣近所を始め行ける人は老若男女すべてが万博へ行った、そんな雰囲気でした」(「昔話・自分史 328 ～ 9 昔・大阪万博の回顧①②」）との自分史がある。

9）10）山田五郎『20 世紀少年白書』世界文化社、平成 16 年，p5 ～ 20。

11）吉井理「夢よ、もう一度」症候群？　大阪万博招致狙う安倍政権（毎日新聞）

12）万博症候群とは万博「会場に入ればいつもお祭り騒ぎで色んな国々のパビリオンをみていると世界旅行をしている錯覚…気分も昂揚し、暇があればついそちらに足が向いて…来場も週に 4 回と記録的な回数となった」(「2005 万博症候群」www.kunio-y.sakura.ne.jp/nikki2005/2005wanbozhengho.html）など自称病的リピーターを指す。“科学万博つくば 85”に行った第二次万博世代がノスタルジーから「愛地球博」にせっせと通うのも万博症候群だという。

13）三浦展『郊外・原発・家族』平成 27 年，p17

14）故高坂正堯氏は「米国の属州になるかも知れない」と危惧していたとの証言もあり、筆者と同年配の横浜の弁護士の回顧でも「私にとって小学校の時代がアメリカによる占領の時代と重なる。そのような事情がきっと私のアメリカに対する見方を規定していると思う。私のアメリカに対する感情はかなり複雑で…アンビバレントな感情が整理されていないまま、未だに心の中に残っている対象である」（堤　淳一 2015 年 08 月 01 日「進駐軍が街にやって来た」弁護士コラム・論文・エッセイ｜丸の内中央 www.mclaw.jp/column/tsutsumi/column036.html）とあり、筆者との共感部分が多い。

15）通信基地は「六甲最高峰の米軍基地 その 1」CANTOIMA（今泉仁志）のブログ - https://plaza.rakuten.co.jp/studiom/diary/200809130000/2008/09/13）参照。

16）日本万国博覧会協会事務次長宮野利夫の証言（民芸 207 号，p16）

17）21）日本民芸館専務理事田中豊太郎の証言（民芸 207 号，p62

18）川勝と河井の関係は山本真紗子「戦前期の高島屋百選会の活動」立命館大学大学院 先端総合学術研究科 www.r-gscefs.jp/pdf/ce09/ym01.pdf）参照。

19）「“西の拠点” 大阪日本民芸館「関西における民芸運動の展開」https://opac.tenri-u.ac.jp/opac/repository/metadata/3458/KOJ001902.pdf）

20）当時はパビリオンのアテンダント・コンパニオンを「ホステス」と呼んだ。

22）柳宗悦（1889 ～ 1961）は宗教哲学者。李朝工芸と出会い、日常品の美に注目し民芸美論を提唱、浜田庄司、河井寛次郎らと「暮らしの美」を旗印とする民芸運動を展開、昭和 11 年日本民芸館を創設した。

23）24）柳宗悦『民芸の趣旨』昭和 8 年,『柳宗悦全集　第八巻』p525 ～ 537 所収。

25）昭和 42 年 3 月 16 日～ 4 月 2 日筆者「沖縄旅行の日程メモ」。

26）『大阪万博と公害多発　昭和ニッポン　一億二・千万人の映像』17 巻、講談社、平成 16 年，p24。

27）残念ながら筆者も詳しく記憶していないが、愛知万博での同館で「アルゼンチンを紹介する映像が 10 分程度流れ…マラドーナが W 杯でやった 5 人抜きゴールのシーン、大統領夫人のエビータ、イグアスの滝など。その後、ダンスのペアが登場した。アルゼンチン・タンゴは…生で観るのは初めて…良いものをみたなぁと思った」（「皆さんは、大阪万博に行きましたか」https://oshiete.goo.ne.jp）との情報から察するに、イグアスの滝などの風景とタンゴは必須アイテムであろう。

28）実際のナショナル・デーは 1970 年 6 月 26 日（金）であった。「アルゼンチン　ナショナルデー【アルゼンチン館】1970 年 6 月 26 日（金）曇（最低 19.0℃ / 最高 24.5℃）アルゼンチン　ナショナルデー来訪 VIP: アルゼンチン　ロドルフォ・フレイン駐日大使夫妻」（「43 年前の今日は大阪万博」1970 年 6 月 26 日 Ads by Yahoo! JAPAN by expo1970osaka 2013-06-26）。

29）アルゼンチン・タンゴ演奏の事実を紹介されたケーナ奏者渡部勝喜氏のブログが貴重である。

30）筆者の 8 mm にはパンチート・カオ楽団のクラリネットが加わった復古調の演奏が撮影されている。

31）諸外国でのアルゼンチン・タンゴの高い評価に反して、「アルゼンチン国内ではタンゴはもはや国民の一般的な娯楽とは言い難い。若者の間ではタンゴは日常ほとんど聞かれなくなったし、サン・テルモにあるタンゴ・バーも平日に行くと閑古鳥が鳴いていることが多い」（宇佐見耕一「ラテンアメリカ 31 アルゼンチン 映画・タンゴ・サッカー」第三世界の娯楽産業 ir.ide.go.jp）と国内での人気低迷が指摘されている。

32）昭和 18 年 1 月「情報局がジャズなど米英楽曲 1000 曲の演奏（レコード）を禁止」（日外アソシエーツ編集部編『日本音楽史事典　トピックス 1868-2014』日外アソシエーツ、2014 年，p69）した。情報局が昭和 18 年 2 月 3 日発行した『寫眞週報』257 号「米英色を一掃しよう」特集の「米英レコードをたたき出そう」の項では「耳の底に、まだ米英のジャズ音楽が響き網膜にまだ米英的風景を映し身体から、まだ米英之匂いをぷんぷんさせて、それで米英に勝とうというのか。敵への媚態をやめよ。耳を洗い、目を洗い、心を洗って、まぎれもない日本人として出直すことがまづ先決問題だ」（「123 歌と戦争（22）―空席通信」On The Net　http://www.sakuramo.to/kuuseki/123.html）と内務省と情報局による「廃棄すべき敵性レコード一覧表」を掲載した。同様の発想でもあろうか、1940 年代後半共産圏各国も思想規制として資本主義の弊害たる退廃的思想を強調、「ジャズはその弊害に染まった音楽だから好ましくない」とジャズを盛んに規制した。ハンガリーでも 1948 年から反米の立場から「堕落したブルジョ

ワジーが愛好する音楽であるとか、秩序びんらんを招く恐れのある音楽」（イベント「新東欧音楽紀行5」の記録：抄録：東欧ロシアジャズの部屋 jazzbrat.exblog.jp/23442424）としてジャズを批判した。

33）万国博モノレールは万博会場内各パビリオンを繋ぐ日本跨座式モノレールの環状路線として昭和 43 年 9 月着工、万博開幕の前日昭和 45 年 3 月 13 日から閉幕の 9 月 15 日まで一周 15 分、運賃無料で延長 4.274km の全線単線、片方向反時計回りで中央口駅－エキスポランド駅－東口駅－日本庭園駅－北口駅－西口駅－水曜広場駅－中央口駅を一周した。運行は東京急行電鉄、保守は東急・東京モノレールであった。（「万博会場内の交通機関」WIKI）

34）レインボーロープウェイは万博会場西口から万国博ホールまで 0.87km を所要時間 7.5 分で結んでいた 3 線自動循環式の遊覧用ロープウェイで、料金大人 200 円、子供 100 円、運営管理は近畿日本鉄道であった。途中で、展望のために回転するようになっていた。（「万博会場内の交通機関」WIKI）

35）「1970 年大阪万博に蒸気機関車を出展」（「カゴメ沿革」www2.meijo-u.ac.jp/～onishi/gyokaipros8/f-enkaku1.html）。

36）通説では「1889 年 6 月 VanderZiepen（独）製造大正 11 年鉄道省より伊賀鉄道へ払下後、加悦鉄道の創業時に入線。修理後、昭和 2 年竣工した。荷物室を備えた緩急車。昭和 45 年大阪万博にドイツ製機関車クラウスとともに出展」（「展示車両紹介・加悦 SL 広場」http://www.kyt-net.jp/kayaslhiroba/exhibits.html）。

37）筆者も社史編纂室長の折、勤務先の倉庫の奥に、九谷焼の名器等を満載した豪華写真帳が秘蔵されているのを発見、さる有力骨董商のご意見を徴したところ、一目見るなり即座に「加賀の名家から出た一級品揃いの『売立目録』。たとえば目録掲載のこの名器は本日香雪美術館に展示されています」とのご託宣であった。尾小屋鉱山等を経営する加賀財閥に尾小屋鉄道等の建設資金を大口融資した挙げ句の顛末が加賀の骨董商に依頼しての売立であった。

38）「カゴメ沿革」（www2.meijo-u.ac.jp/～onishi/gyokaipros8/f-enkaku1.html）。

39）昭和 41 年 3 月 7 日稚内を 6：45 出発し、幌延で羽幌炭砿鉄道の車両に出会い、留萌で天塩鉄道の車両を見学後、留萌を 12：09 に出て、石狩沼田から札沼線の普通列車を乗り継いで終着駅札幌に到着したのは 16：48 であった。（日本縦断旅行時刻表「日本一周旅行　41.3.2 ～ 41.3.18」）

40）篠崎隆「文化財としての加悦鉄道車輌群（その 3）」http://www.nykshayuukai.jp/kayatetudou3.html）。

41）『関西の鉄道』NO.60 の伊賀鉄道の車両に関する（hirosi，関西鉄道研究会刊行）。

42）milke_Brooks「加悦鉄道ハブ 3 の車歴の謎を解く」milke's Foundry ―楽天ブログ https://plaza.rakuten.co.jp/milkesfoundry/diary/201301060000/）。

43）岩堀春夫「万博のクラウス：鉄道写真家 岩堀春夫の blog」（livedoor Blog blog.livedoor.jp/nainen60/archives/54722399.html）。

44）平成 29 年 12 月 16 日公開講座の折、種々ご教示賜った前田茂雄氏ら万博関係者各位、コメント下さった寺本敬子氏、当日の 8 mm 上映にご尽力下さった早川優氏ら愛好者各位に深謝申し上げたい。